

Wimba での日本語教材開発例

THE USE OF WEB-BASED VOICE TOOL FOR JFL MATERIALS

林 あさ子 カリフォルニア大学ロサンゼルス校

Asako Hayashi University of California, Los Angeles

Abstract: This presentation demonstrates that the development of course materials for advanced Japanese learners and Japanese as heritage language learners using a web-based voice tool called WIMBA. In particular, this project aimed at developing Content Based Instruction (CBI) materials for Japanese as heritage language (JHL) learners in the University of California system. The materials using WIMBA was designed to improve oral proficiency of JHL learners. In this presentation, I introduce the rationale for using CALL materials for JHL learners, sample project work using WIMBA, and the results of the survey asking about the students self evaluation for the improvement of their oral proficiency.

Keyword: web-based, voice tool, WIMBA, advanced learners, Content-based

近年の日本語学習者の多様化に伴い、日本語教育の現場では、各教師が学生の知的好奇心を促す『生教材』による内容重視(content based instruction; CBI) のカリキュラムを作成していることが多い。特に時事問題を扱うような上級コースでは、常に教材を改変する必要があり、教師にとってたいへん大きい負担となっているのが現状ある。カリフォルニア大学では、3 キャンパスの代表者が中級、上級、継承語学習者のための生教材を用いた内容重視の教材を開発し、オンライン化して各キャンパスで使用できるシステムを開発している(Morioka, et al. 2006)。

この発表では、前記のプロジェクトの一部として開発した継承語学習者コース用の教材例を紹介する。このプロジェクトでは、Wimbaというボイスツールを使用し、日本語教育のカリキュラムの中で、受け身になりがちな教室内での言語活動を補うべく、教室外での学生主導の言語活動の促進を目的とした教材を開発した。

対象となったコースを受講した継承語学習者は、日本語上級話者で、大学入学以前に日本語学校(日本語補習校など)で平均6.8年日本語を学習し、日本語母国語話者が家族に最低ひとりはいるという環境で育ち、日本語能力試験1級程度の日本語能力を有している。多くの継承語学習者に見られる特徴として、発話能力に比べ、識字能力が弱い、つまり日本語継承語学習者においては、漢字の読解能力が低いという点が挙げられるが、本プロジェクトの対象となった学習者の漢字識字能力は、600~1000字程度(中上級)であり、バランスのとれた日本語上級学習者と言える。本コースの主目的は、継承語学習者の読解能力を高めることであり、教室内の活動は主に、与えられた読み物を読解し、慣用表現を習得し、内容について話し合うという流れになっていた。このような発話能力に問題のない日本語上級話者を対象にしたコースでは、教材も読み書き中心になり、従来ではいわゆる「話す練習」というものはカリキュラムに加えられなかった。しかし、既に本コースを受講した学生からの意見によると、本コースの受講者である継承語学習者は、将来の就職に備え、自分の日本語能力をプロフェッショナルレベルに到達させたいという目標を持っている事が明らかになった。林(2005)は、この結果をもとに発話能力の高い日本語継承語学習者も、さらにその能力を高めるためのカリキュラムが必要であることを提案

した。週150分という限られた教室内での学習時間を有効に使うため、教室外で簡単に使用できるWimbaのようなウェブベースのツールは、その至便性が高く評価できる。

Wimbaはオンラインベースのボイスツールで、既に一般的となっている電子メール、チャットルーム、掲示板などを文字ではなく音声で行うことができ、学生は母語話者の発話のモデルを聞き、自分の発話を録音して提出したり、教師は提出された発話に音声でフィードバックを与える事も可能である。また、従来教室内での試験でしか行えなかった聴解問題をオンラインで学生に提供し、その解答を提出させることもできる (Liu and Kudyma, 2005)。本コースでは、学生がそれぞれ「現代日本の社会問題」についてのトピックをひとつ選び、リサーチを行い5分間のプレゼンテーションを録音した。ほかの学生は、そのプレゼンテーションを聞き、コメントを録音し、さらに日時を決めてチャットで意見交換をした。最後にグループでの討論をクラス内で行い、それぞれの社会問題の関連性、共通点、対策などをまとめた。このプロセスを通して学生は教室外でのグループ活動を積極的におこない、学習意欲も高まったと報告している。

Wimbaのようなオンラインツールを使用する利点は、従来の読み中心の手作り教材に、簡単に音声教材を組み込む事ができ、学生の教室外の言語活動を促進できるという点が一番大きい。この音声ツールを使用した教材を採用したコースの評価は非常に高く、大多数の学生がその至便性と自発的な教室外学習での使用例を利点として挙げている。本発表は、上級学習者と継承語学習者のコースでのWimbaの使用例を中心に紹介するが、Wimbaは発音やアクセントの矯正のような個々へのフィードバックが必要な指導案に適しているため、初級学習者のコースにおいてもたいへん有効である。現在、UC systemの外国語プログラムでは、Wimbaを利用した初級教材の開発が進んでいるため、今後は日本語プログラムでも初級から上級まで様々なレベルでのWimbaを用いた音声教材の作成が期待できる。

REFERENCES

- Hayashi, A. (2005). *An Analysis of the Needs of Japanese Heritage Language Learners and CALL Materials to Satisfy Their Needs. Paper presented at the Heritage Language Symposium, University of California, Los Angeles*
- Liu, T. and Kudyma, G. (2005). *Beyond Digital Audio: Wimba, Adding a New Dimension to Language Learning & Teaching*, 2005 from <http://www.international.ucla.edu/languages/technology/article.asp?parentid=33838>
- Morioka, A., Chinen, K., Hayashi, A., & Ushida, E. (2006, April 22). *Japanese CBI Project*. UC Language Consortium Conference on Theoretical & Pedagogical Perspectives.